

日本と中国における 仏教と固有の宗教との交渉の比較

河野 訓

日本の神道と仏教の間で生じた神仏分離に相当する中国における宗教事象は仏教と道教の間で生じた種々の対立・抗争であろう。中国では宋朝以降、儒仏道三教を融和させる傾向が強まったが、その中で、幾度か道教が仏教に対して優位に立ち、仏教を抑圧し、廃仏に至ったケースがある。その融和と対立は、千年以上も続いていた神仏習合の後に到来した明治維新の神仏分離と廃仏毀釈の研究に何らかの示唆となろう。

中国の北宋末の皇帝である徽宗（位一一〇〇—一二五）は道教を好み、仏教の施設に道教の神（三清）や老子、孔子の像を置くことを禁じた。これは仏教と在来宗教である道教・儒教との分離を意図したものである。また、歴史上、繰り返し返されてきた道仏の優劣如何については道士の位を僧侶の上におくとした。この徽宗の背後にいたのが道士の林靈素で、仏教の非を説き、宣和元年（一一一九）には仏を大覺金仙と号し、余を仙人、大士と号し、僧を徳士となし、寺を宮とし、院を観とせよ、という詔が出されるに至った。道教の女冠は女道とされ、仏教の尼は女徳とされたが、これらは仏教を道教化して存続させるものであった。抗議した僧侶の中には杖にうたれて殺された者や配流者がいた。しかし、行き過ぎた林靈素に徽宗はその暴挙を止

めさせた。宣和二年秋には仏教本来の僧尼という名称に戻されたが、徽宗の妄信とそれを利用した道士林靈素により仏教徒が辛酸をなめた時代である。

次に、金代の終わりにかけて元代にかけて仏道の論争がおこった。この頃有力となった全真教は十二世紀に王重陽が儒・仏・道を融合させて創った宗教であり、特に初期においては道教というより当時の新宗教である。王重陽の直弟子のひとり丘処機（長春真人）がチンギス・ハンに会いその信任を得、彼が中国を支配すると、大きな勢力をもつようになった。その勢いのもと、仏教寺院を道観として乗取り、僧侶の殺害など、特に仏教に対抗的な厳しい態度をとった。仏教界には、後のフビライ皇帝の師となった印簡やフビライ即位後に帝師となったパスパもいて、道教側の李志常と仏教側の福裕やパスパらは度々、道教經典の『化胡経』『八十一化図』の真偽について論争した。その結果、李志常ら道教側は論破され、偽経とされた道教經典は焚焼され、僧侶となった道士や仏教側に戻された道観が多数あったと記録されている。但し、金末元初の仏道論争の詳細な記録は仏教の立場から書かれた『弁偽録』のみであり、しかも、その内容に齟齬があることが指摘されている。

以上の二事例のうち、後者の金末元初の仏道論争については仏教側の史料しか残されておらず、痛めつけられた側の史料が乏しい。したがって、史料の偏りの是正、更なる史料の発掘とそれに基づく公平で客観的な研究が必要である。日本における神仏分離・廃仏毀釈に関連していえば、仏教寺院等に残されている明治初期の生の史料を発掘する必要がある。また、先学に

パネル

より中国の宗教研究では仏・道を分離しての実態把握では真の姿を歪める可能性があることが指摘されている。神・仏あるいは仏・道の相克について文献などを利用した相互排斥の歴史事実の学的説明の必要は言を俟たないが、研究者が上からの目線で縦割りにしか宗教を捉えられないのでは幾つもの宗教や神仏に関わっている民衆の宗教の真の姿の説明は難しい。中国の宗教史でみられる中国（中夏）成立の儒・道とインド（夷）由来の仏という構図は儒仏道三教交渉史では夷夏論争などと呼ばれる。日本の神・仏の相克の研究のひとつとしての神仏分離・廃仏毀釈研究では、個々の事実説明とともに背景にある明治維新という強く日本を意識した歴史変動を念頭に入れた研究が必要である。

パネルの主旨とまとめ

櫻井 治 男

本パネルは次の主旨を設定して行なった。すなわち、日本という時空間における宗教現象として従前注目されてきた研究対象に神仏関係がある。これは神仏習合、神仏交渉、あるいは神仏混淆という表現をもつて、国内のみならず海外の宗教研究者にも関心が持ち続けられてきたテーマでもある。研究内容は多岐にわたるが、神仏習合について見れば、その現象の発生から展開にいたる歴史上の課題、また近世初期の武将にみられる神

国思想や各種の神道説など思想レベルや儀礼レベルの問題、あるいは個別の寺社における状況の説明など研究の蓄積が重ねられてきたという経緯をもつ。

神仏習合は、過去の歴史的課題だけではなく、現在に続く現象として日本宗教を特徴づけてきた実態があるが、その習合形態を制度的に区分する施策が、日本近代の社会変動、政治制度の変革のなかで採られたことも知られるところである。この施策を一般には神仏分離、神仏判然、廃仏毀釈と呼ばれるが、近代の宗教史を論述する上では必ずといってよいほど、取り上げられ、国内外の宗教研究において看過できない重要事項となっている。

一方、近年、神仏分離研究について再検討がなされ始めている。その特徴は、神仏分離を単に神道側や仏教側の得失的な観点から論じる傾向を脱却し、この施策が如何に日本近代の宗教の歩みを形成してきたか、また神仏分離と言われる「分離」とは何を意味するのか、さらにはその前提として位置付けられている神仏関係の「習合」「交渉」「混淆」とは何かを改めて歴史的な観点、あるいは神道学や仏教学、宗教学・民俗学など学術的手法をもつて問い直すところにある。また、神仏習合・分離の内容理解の上で、基本となる諸資史料の発掘、各地方・各社寺の実態的な分析研究の必要性が一層認識されている。

パネルの発題は、①「近世・近代の神仏関係の位相」（阪本是丸）、②「宗教都市宇治山田における神仏分離の諸問題」（牟禮仁）、③「近世における神仏関係―習合と分離―」（澤博勝）、④「日本と中国における仏教と固有の宗教との交渉の比較」